

歴史の闇に葬られた日本陸軍のリアウ諸島租借工作

渡辺洋介 (ピースデポ研究員)

数年前、通説を覆しうる新史料がシンガポールの収集家・研究者であるリム・シャオピン (Lim Shao Bin) によって東京神田の古本屋で発見された。一般に日本政府による東南アジアへの南進政策は1930年代に開始されたと言われているが、その史料によると、日本陸軍参謀本部は1910年に既にボルネオ植民地化の構想を持ち、その第一歩として、シンガポールの対岸に浮かぶ蘭領リアウ諸島の土地を租借していたことが判明したのだ。ところが、この事実はある事情から闇に葬り去られることとなる。



陸軍大将・宇都宮太郎 (筆者提供)

リアウ諸島租借工作を主導したのは、当時、陸軍参謀本部第二部長を務めた宇都宮太郎である。宇都宮は後に朝鮮軍司令官を務め、大将にまで昇格した大物であった。彼の抱く構想は壮大で、積極的膨張主義といえる姿勢を有する一方、将来の主敵は欧米となると予測しており、そのためには日本が主導してアジア諸国と手を組む必要がある

とも考えていた。当時から大東亜共栄圏に連なる思想を持っていたのである。

その宇都宮のもとに、日本がリアウ諸島を租借できるかもしれないという情報がもたらされたのは1910年4月26日のことであった。その日の日記に宇都宮は「此租借案件は、或は大目的の緒となり得べきやも知れず」と記し、期待感を膨らませている。

当時、リアウ諸島は、オランダとリアウ王朝の二重支配といえる状況にあった。リアウ王朝はマラッカ王朝の血筋を引く伝統あるマレー人の王朝で、ブギス人と協力して古くからリアウ・リング諸島を支配していた。その後、英蘭協約(1824年)によりリアウ諸島はオランダの勢力範囲とされたが、リアウ王朝はその後も存続し、統治を続けていた。

ところが、オランダは1905年ごろからインドネシア各地に残る王朝を武力で征服するようになり、リアウ王朝に対しても国王の政治的実権を奪う内容の協定に署名するよう圧力をかけていた。王朝存亡の危機に立

たされたリアウ王朝がこのとき目をつけたのが、当時、日露戦争に勝利して存在感を増していた日本であった。

そうした状況において、1910年11月1日、リアウ王朝のアブドゥル・ラーマン国王は宇都宮の代理人である上田丑松との間で、キラ島、モモイ島、アウィ島というリアウ諸島の3つの小島を租借する契約に署名した。その狙いはオランダに対抗すべく日本を味方につけることにあったと思われる。ところが、アブドゥル・ラーマン国王はオランダとの権力闘争に敗れ、1911年2月にシンガポールに追放されてしまう。

一方、宇都宮のリアウ諸島租借工作も、対欧米協調を基本方針としていた政府主流派から批判されることとなる。そもそもこの工作は当時の陸軍大臣・寺内正毅の正式の許可を得ずに、宇都宮が数人の協力者を得て、政府の資金を流用して行った秘密工作であった。

この工作はまず、シンガポール領事館で問題となり、工作にかかわった陸軍駐在武官・松本五左衛門が釈明に追われ、リアウ諸島の租借はゴム栽培を目的としたものに過ぎないという苦しい弁明を強いられた。当然、外務官僚の岩谷謙吉副領事はこの釈明を受け入れず、戦略的要衝のマラッカ海峡に陸軍関係者が土地を租借すれば、その目的が何らかの軍事上のものであることは想像にかたくないと批判した。

この問題は1911年1月に東京に報告され、外務大臣小村寿太郎名義で陸軍省に問い合わせが送られた。この工作は、既に述べた通り、参謀本部の宇都宮が主導したのだが、このとき陸軍省から外務省へ送られた回答は「参謀本部に於ては該事件には何等関係無之候」という責任逃れの虚偽報告であった。

これによってリアウ租借はゴム栽培を目的とした「私人」の行為ということとなり、陸軍参謀が関与した真実は闇に葬られ、つい数年前まで歴史の中に埋もれていたのであった。

< 筆者紹介 >

1970年生まれ、東京都出身。シンガポール国立大学博士課程(日本学研究科)修了。専門は、アジアにおける戦争の記憶と歴史認識。日中韓三国共通の歴史教材作りや高嶋伸欣琉球大学名誉教授が主催する「東南アジアに戦争の傷痕を訪ねる旅」の運営にも携わっている。主な著書(共著)に『旅行ガイドにないアジアを歩く シンガポール』(梨の木舎、2016年)、Remembering Asia's World War Two (Routledge, 2019)ほか。